

## マッシリアのピュティアスとトゥーレに 隠された謎 (1)

楠 田 直 樹

### はじめに

地中海世界というのは、ヨーロッパ、アフリカ、アジアという三大陸に囲まれた内海を基点とする世界のことであるが、早くからその地域で活発に活動していた人々が形成し築いてきた世界である。ジブラルタル海峡、いわゆるヘラクレスの柱を越えて、その先まで出かけていく人々は少なかった。また、地中海を東西に分けたときに、まず文化が発祥してきたのは東部であり、どちらかという西部は未開の地に近い状態であった。だから、西地中海への進出が生じた後に、その先への探検を試みる人々がいたのは、当然の成り行きである。

その中で、異彩を放っていたのがフォーカイア人であり、彼らが建設したのがマッシリアである。その当時アウリエヌスやカルタゴのハンノなどのようなさまざまな探検家といわれる人々の作品が存在していたことが知られているが、このギリシア植民市マッシリアにも地理学者で、探検家であったピュティアス（古典ギリシア語：Πυθέας ο Μασσαλιώτης; ラテン語：Pytheas Massiliensis; 前 4 世紀）という人物がいた。前 325 年頃にヨーロッパ北西部に探検旅行を実施したとされているが、彼の叙述した航海日誌『大洋について Περί Ὠκεανοῦ』（Gemin. Elem. Astr., VI. 9 = F 13a Bianchetti = F 9a Mette にその存在が証言されている）は古代では広く知られていたにもかかわらず、

現在残存していない。そのため、反論が多く存在し、当代一流の地理学者であったストラボンや歴史学者ポリュビオスからは以下の彼の業績と思われるものも戯言のように片付けられていた。

- (1) ブリテン島周航と各地訪問
- (2) 真夜中の太陽に関する叙述 [当時、理論的には、夏の夜が想像以上に短かったり、太陽が夏至に沈まない寒帯や温帯の存在は、既知]
- (3) 万年雪や漆黒の暗闇の国（ヒュペルボレイオス人 Hyperboreans の国）の報告 [ヘロドトスの叙述などにも見受けられる]
- (4) 遠くにあると考えるトゥーレという理想郷を地理的イメージに導入
- (5) 潮の干満の説明に月をその原因として主張
- (6) 北極海の極氷やゲルマン民族の報告 など

このようなピュティアスの言質に対しては、古代からさまざまな異論が存在し、その信憑性は賛否両論があり、なかなか一筋縄ではいかないものがある。そのうえで、その年代設定の問題とともに、ピュティアスは、アイスランドにまで到着していたかもしれないという可能性を含めて論述していきたい。

## 1. 西地中海におけるギリシア人とカルタゴ人

前 500 年からヘレニズム時代後期にかけて、ヘラクレスの柱の先まで航行したギリシア人の活動がほとんど見られなくなったのは、カルタゴ人の妨害によるものだと長らく推測されてきた<sup>(1)</sup>。しかし、このようなカルタゴ人の干渉の証拠は明白だというよりもむしろ情動的なもので、その初期の頻度とは対照的に、この時代以後ギリシア人の大西洋探検が限定されたこと、古典古代の地理的史料の中に大西洋に関する知識がほとんどないこと、そしてヘラクレスの柱の先への航海が可能にも願望にもならなかった前 5 世紀のほんの一瞬を基にして出てきた考え方だった。このうちのいくつかの航海は、黒海についてギリシア人の積年の不正確さから生じてきているにちがいないが、それにもかかわらずヘラクレスの柱を越える活動の危険性を新たに強調しており、その先にあるものについて正確な情報を獲得することがで

きなくなっていた<sup>(2)</sup>。また、大西洋について驚くべき無知さもあった。例えば、ヘロドトスの大西洋に関する知識はまことに薄っぺらなものであった。すなわち、「私は、努力したにもかかわらず、見ることもなかったし、ヨーロッパの先に大洋があるのかどうかをだれからも学ぶことはできなかった」(Herodot.3.115) とある。すでに広範なギリシア人の探検を与えていた時期だったので、これはまことに奇妙なことであり、ヘロドトスの時代までに、初期の航海が忘れ去られ、大西洋についてその当時のギリシア人がほとんど知識を有していなかったことを示しているように思える。

このような状況の中で、政治的立場を暗示していたものは恐らくローマ人とカルタゴ人との間の条約であろう。その条約はローマ共和政の最初の年に年代づけられ、伝統的に前 509 年とされるが、ローマ人をしてある地域に彼らの船舶を持ち込むことを禁じていた条項があった<sup>(3)</sup>。条約がカルタゴ周辺の領域やリビアの沿岸を言及しているけれども、カルタゴ人が自領と見做していた領域内に他国の船舶の航行を確かに制御しようとしていたことを示している。そしてその領域はヘラクレスの柱の先の地域を含んでいたのだと考えられる。この遠く西方の地域は、ローマが利益享受していた地域がその近くになかったので、条約内では明示されなくて、それはカルタゴと西方ギリシア、とりわけマッシリアとの間に衝突があった地域だろうと推測される。このように考えてみると、カルタゴ人はこの政策によってどのくらいの成果を収めることができるのか議論されるけれども、ヘラクレスの柱の先を航行することをギリシア人に禁じることで、条約を通して企図しようとしていたふうに見て取れる。ただ少なくとも、マッシリア人は場合によってはそれを無視できたように思える。なるほど、マッシリア人はカルタゴ人を含んで海上勢力を論じる人々の考え方に挫折を繰り返し強調し、公にされてきた<sup>(4)</sup>。

そうした状況にもかかわらず、ギリシア人がその将来性を考えてヘラクレスの柱の先へ探検航海するという歴史的な流れは、前 5 世紀末に一早く一時的なものとしてやってきた。ただ、その理由をはっきりしない。その原因は、活動的なカルタゴの妨害だったのか、意気を挫く事情があったのか、あるいは前 8 世紀に始まったギリシア諸ポリスの伸張主義の単なる終焉であったのか、議論の分かれるところである。マッシリア人は前 6 世紀にフランス、スペイン沿岸に沿って辺境植民地を建設していたが、その考古学的証拠はギリ

シアとタルテッソスとの取引が前 500 年頃にすでに終わっていたことを示している<sup>(6)</sup>。それはギリシア人の探検航海の縮小を意味し、ヘラクレスの柱の先への海上輸送行動の停止を意味しているのであろう。カルタゴ人がこれに関わっていたのかどうかは議論のあるところだが、その地域にギリシア人は何も関心がなかったという彼らの信念を勇気づけるものだったはずである。勢力均衡の一般的な変化もまた一つの役割を演じていたといえる。前 480 年にヒメラでのカルタゴの敗北 (Herodot.7.166) は、その関心をヨーロッパの先へ、アフリカの方へ、ヘラクレスの柱の先へと方向転換し、そこにギリシア人を巻き込むのは当時の状況から考えて不可能に近いといえるであろう。

エウトゥメネス以後一世紀以上の間、ギリシア人の大西洋への旅に関しては何の記録もない。このような変化はただ前 4 世紀後半になって初めて目に見えるようになってきただけである。偽スキュラックスの典拠の中に引用されていたケルネへ航行した氏名不詳の旅行者は、その最初の指摘であったろう (Pseudo-Skylax 112)。前 320 年代の 10 年間に、別の旅行者は最も意義深い探検航海に乗り出していた。その人物はマッシリアから出発したピュティアスであった。その一世紀内で、彼の航海はアルゴナウテースのそれと同じくらいのものであったといわれている。つまり、「宇宙の限界にあるヨーロッパの極北地域を探検」した人物であった (Polyb.34.5.9=Strab.2.4.2)。

## 2. アレクサンドロス大王と西地中海の関わり

前 334 年初期、アレクサンドロス大王は、一年半前に父が暗殺されて以来、マケドニアの王だったが、ギリシア本土から小アジアへと東へ移動していった。二年後に、彼はチュロスにいた。その古代フェニキアの都市を長期にわたって実行した包囲は彼の生涯の中でもよく知られた部分だった<sup>(7)</sup>。チュロス包囲が始まったときに、チュロス人はカルタゴの援助をうまく要請できず (Diodorus 17.40.3; Quintus Curtius 4.3.19)、結局カルタゴに婦女子や子供を送っただけだったのでであろう (Diodorus 17.41.1-2, 46.4; Quintus Curtius 4.3.20)。さらに、現実にはそのときチュロスにカルタゴ人がいたといわれている。彼らは宗教的巡礼者であり、都市が陥落したときにアレクサンドロスによって容赦されていた<sup>(7)</sup>。このような出来事は、カルタゴ人がカルタゴ建設後数百年にわたって母市との間で維持していた密接な関係、そしてアレク

サンドロスの行動についてよく情報化され、脅威を感じていたという関わり  
のいずれをもよく示している<sup>(8)</sup>。それで、チュロス陥落後、アレクサンドロ  
スの意図に憂慮しなければならなかった。そして全く道理上、そのときアレ  
クサンドロスがカルタゴに宣戦布告する (Quintus Curtius 4.4.18) のか、少な  
くとも西方遠征が計画されていたという噂があったし、とりわけそれがアフ  
リカ周航によってなされるというものだった<sup>(9)</sup> ので、戦々恐々だったはずで  
ある。

アレクサンドロスの計画に関わりのあった他の都市はマッシリアだった<sup>(10)</sup>。  
例えアレクサンドロスがライバルのカルタゴを攻撃できたとしても、その付  
近に彼が関心を寄せていたり、必要とするものはほとんどなかったからであ  
る。ただ、もしアレクサンドロスがカスピ海にやってきた (Diod.17.75; Plut.  
Alexand.44; Arrian, Anabasis 7.16) という次なる報告がマッシリアに知らさ  
れたならば、これは、当時カスピ海が外洋の一部であったということがその  
時代の一般的な見解だった<sup>(11)</sup> ので、攻撃への予兆だと見做されたかもしれ  
ない。その地方へのアレクサンドロスの介入は西方にさらなる脅威をもたら  
したと考えられるからである。アジアとヨーロッパの北岸横断の旅はアフ  
リカ周航と同等の可能性があると思われていた<sup>(12)</sup>。アレクサンドロスがカスピ  
海遠征のために船舶を建造するように命じたのと同じ時期に恐らく符合して  
いたというわけではないのだろうが、多数の使節が王のもとにやってきたの  
は王の死の数ヶ月前で、この西方の不安感がバビロンで最高潮に達していた  
(Arrian, Anabasis 7.15-16; Diod.17.113)。使節たちはほとんど全ての世界から  
やってきたといわれていたが、特に関心を抱いた中には西方への関心が強調  
されていた。その中には真偽のほどは疑わしいのだが、ギリシア人にはそれ  
以前未知の土地だったところからも使節がやってきたといわれた。カルタゴ  
人に加え、リビウフェニキア人やガリア人に限らず、ケルト人、イベリア人、  
ブルッティウム人、ルカニア人そしてエトルリア人もその中に含まれていた。  
また、ローマからの使節も叙述されていた。ただ非常に時代錯誤的な用語な  
ので、表面上クレイタルコスの事実描写の直後に記録されている (Kleitarchos  
[FGrHist #137], fr.31 [= Plin.NH 3.57]) けれども、アレクサンドロスに関する  
後世の史料によって疑われていた。アーリアノスが現存史料とした詳細は疑  
わしいもの — アレクサンドロスがローマの将来の栄光についての預言をし

ていた — で、原報告の一部ではなかったにちがいない。

それにもかかわらず、前 323 年初期バビロンへの使節のリスト — ローマを含んでいたのか否かは別にして — は、西地中海の人々にアレクサンドロスの行動に特別な関心を寄せさせていた。史料の調子が想像以上にアレクサンドロスに好意をもっているけれども、彼の西方への意図についての不安感や好奇心が最大の係争点であったのは確かであろう。いかなるギリシア都市も使節の名として記述されていないが、ディオドロスは、「リビュフェニキア人やヘラクレスの柱までの沿岸のあらゆる人々」の直後に「ヨーロッパのギリシア諸都市」として引用している。これらのギリシア諸都市はマッシリアとその関係都市以外のものではないはずである。さらに、ローマ人がそこに含まれていたならば、マッシリア人はこの二つの都市がほぼ一世紀も前から関わりがあったので、間接的にそこに含まれていた可能性は高いものがある<sup>(13)</sup>。

このように、アレクサンドロスの行動や彼の将来計画の噂が西地中海の住民の態度や意識を深く変化させたと推測させる理由がある。使節はアレクサンドロスの西方への関心を初めておぼろげに感知するおよそ 10 年ほど前に始まった数年間の関わりの頂点を示していた。西方の都市はアレクサンドロスの侵略を想定して反攻を計画していたであろう。アレクサンドロスが西方の領域に近づかなかったこと、あるいは彼が使節派遣の数ヵ月後に死んでしまったこと、そして後継者たちが直ちに西方への計画を捨てたことを知るはずはなかった (Diod.18.4.6)。

### 3. ピュティアスの人となりとアリストテレス

ピュティアスが極北へ叙事詩的な旅をしたのは、この混沌とした文脈の中で、とても不確実な中にあった。マッシリアが、アレクサンドロスへの反応に関してどれくらい反映しているのかを知ることはできない<sup>(14)</sup>。マッシリア人はアレクサンドロスの予期できる到着に当然準備しようとしていたことであろう。恐らく、カスピ海から西地中海に彼が達する、あらゆる可能性を知覚することで、気の長いピュティアスの旅の質は緊急性に欠けるものであったと考えられる。研究者の多くは、特別な手はずがヘラクレスの柱の先へのマッシリアの外洋遠征を、カルタゴをして許すことになっていたのかどうか

に関心を寄せているが、これはさほど重要なことだとは思えない。カルタゴはアレクサンドロスに対する自らの準備に気を煩わされていたのかもしれないし、もっと重要なこととして示されているように、ピュティアスは恐らくヘラクレスの柱を越えて航行してはいないであろう。ただ、彼の旅は公式な立場のものだったのだが、少なくとも彼の航海はその当時の政治的な現状がマッシリアの航海の中で極北への関心を広げる刺激を育んでいたことを示していた。

ピュティアスを叙述する初期の史料は、メッサーナのディカイアルコスである (Strab.2.4.2 = Dikaiarchos, fr.124 Mirhady)。彼はアリストテレスの学生として、遅くとも前 320 年代に活動しはじめていた (Dikaiarchos, fr.4 Mirhady)。彼以前にピュティアスに関する現存史料は、アリストテレスにもエフォロスにもない。この二人とも、ピュティアスが刊行したものに関心を示していたはずである。アリストテレスが自らのもつ広範な天文学的地理学的知識を用いていなかったとは考えにくい。エフォロスはその歴史が前 340 年のペリントス包囲で終わり、恐らく数年後以内にそれを刊行していた<sup>(15)</sup> のであろうが、それはまたとりわけ注目値するピュティアスの探究をもとしたものであったのであろう。エフォロスの広範な歴史作品は世界地理という主要な部分を含んでいた。彼は世界をインド、エティオピア、スキュティアとケルトの四つの部分に分け<sup>(16)</sup>、恐らく初めて詳細に地球の北側の地域を叙述した<sup>(17)</sup>。エフォロスの歴史の中でのこの地理的な到達は大規模なものだった。すなわち、ガデスやスペイン沿岸の叙述<sup>(18)</sup> はケルトの領土の詳細な記述に続き、キンメリア人に関する議論は、彼らはケルト人の先に居住していたのだが、そのあとに続いていた (Ephoros, fr.131, 134 = Strab.4.4.6, 5.4.5)。そしてホメロスの時代はずっと遠方の民族に関する凡例があったとしても、常に暗闇の中に生きていた (Hom.Od.11.13-19)。それで、エフォロスの航路はイステル河口やスキュティアの領土に達していた (Ephoros, fr.157 = Strab.7.3.15)。恐らく以前には誰一人としてこのように詳細にその地方を論じたことはなかったであろう。初期のギリシアの文献は極北の地にヒントを与えるのみだった<sup>(19)</sup>。さらに、エフォロスは潮流現象、あるいはピュティアスへの関心のあるものに関わっていた (Ephoros, fr.132 = Strab.7.2.1)。

エフォロスの歴史は、アレクサンドロスがカスピ海経由での攻撃が可能なことについて、西方ギリシア人の間で関心が広がりはじめたのと同じ頃に現われた。数年内に、ピュティアスの遠征は歴史家の北方航路の文献を繰り返していた。これは符号以上のものがあるように思える。そしてピュティアスがマッシリアの公式派遣として前進していたのかどうか、彼の旅はその時代の係争点に結びついていた。エフォロスの記述は、彼の論じていた多くの場所を訪れていた旅行者を叙述するために、ピュティアスの旅が歴史家に反応し、知識として彼を利用していたという間接的証拠でもある。

いくつかの事実がピュティアスについて決定されるはずである<sup>(20)</sup>。ポリュビオスの叙述から彼が私人で貧しかったという人間そのものについての単純な所説がある<sup>(21)</sup>。ポリュビオスは自らの探検のためにスキピオ・アエミリアヌスの補助金を受けていた (Plin.NH 5.9) のだが、土地探索 (Polyb.12.27.6) が高価でピュティアスの貧困さのゆえに、彼の旅そのものを信じられないものとして利用していたので、これでさえも反論になってしまう。ただ、その所説 — ポリュビオスが論じなかった — は、ピュティアスが国家援助なしに自らの調査を前進させたことを示唆していた。こうした文脈<sup>(22)</sup>の中で、ポリュビオスの商人嫌いやピュティアスの間接的叙述は、ピュティアスが取引業者か商人であったという仮定を導き出しているが、証拠が付随的である<sup>(23)</sup>。『ギリシア人類学』の中で氏名不詳の風刺詩はピュティアスという人物を褒めており、彼のもつ顕著な知識で有名であり、幸福の島へ行ってしまったというものだった (Greek Anthology 7.690)。この風刺詩のテーマは知られていないが、ピュティアスの名を知的活動と結びつける関心があり、遠方に急派された旅の凡例として取り扱われていた<sup>(24)</sup>。

二つ目に知られた事実はピュティアスの作品『海洋について (Περὶ τοῦ Ὠκεανου)』である<sup>(25)</sup>。これは二つの漠然とした史料、すなわち恐らくはユリウス・クラウディウス朝時代の人物であったとされる天文学者ロードスのゲミノス (Geminus, Introduction to Phenomena 6.9) とビザンツの学者であるコスマス・インディコフレウス<sup>(26)</sup>のものによってのみ引用されているものである。天文学の作家がピュティアスの論考を引き合いに出したという事実はそれ自体意義深いものである。というのも、彼に関する三つ目、四つ目の既知の事実を示しているからに他ならない。ピュティアス以外の古代の

探検者には、その報告が本質的に船舶操船術、地名に由来する地理、民族そして商業問題に限られていたのだが、ピュティアスは知的分野としての地理や天文学に意義ある寄与をしていた。彼は *philosophos* (Kleomedes, *Meteora* 1.4.208-10) とか *doctissimus*<sup>(27)</sup> と呼ばれていた。ストラボンでさえ、ピュティアスを批判にのみ引用していたのだが、しぶしぶ彼の努力を *historia*、つまり探究と呼んでいた (Strab.7.3.1)。作品の幅広さ — 実質的にいかなる地理的限界も示していない — は、ピュティアス自身の探究の幅広さを指摘している (Pytheas, Roseman, ed., p.1)。このように、不十分な情報のもとで、彼は古典古代の他の旅行者や探検者とは一線を画している。恐らく、国家政策の道具としてではなく、ヘロドトスのように、純然たる探究の理由で、旅をした科学者であり、数年がかりで自らの努力の範囲として大洋全域を見た最初の人物だったと思われる<sup>(28)</sup>。

彼がマッシリア政府の派遣団であったとは思えない理由は、彼の旅の性質そのものについて疑問が生じ、彼がそれにどうして踏み込まざるをえなかったのか、そしてとりわけピュティアス自身、彼の教養に関わる問題、さらにはどこまでそれを受け入れたのかといった疑問が生じてくるからである。これはアリストテレスの時代であり、アリストテレスがリュケイオンという学派 — 現在では普通リュケウムとして知られている — を創設していたとき、そこで、恐らく一部には前 335-334 年のプラトンのアカデミア<sup>(29)</sup> の経営についての論争があったためであったと考えられる (Diogenes laertios 5.10 [第 111 オリンピアードの第二年])。アリストテレスは、自身がなくなる数ヶ月前、アレクサンドロスの死後アテネで動乱があり、カルキスに撤退する 13 年前にその学派の長だった (Diogenes Laertios 5.5-6)。ただこの期間に、彼は学徒の広範な能力を引き出そうとしていたことも事実である。作者不詳のラテン語の『アリストテレス伝 *Life of Aristotle*』 (*Life of Aristotle* 46-7) の中に見られるリストがたった 6 名のみ — エレススのテオフラストス、エレススのファニオス、ロードスのエウデモス、ミレトスのクリュトス、タラスのアリストゼノスそしてメッシーナのディカイアルコス — の名があるけれども、大変興味深いのは、彼らがギリシアの中からやってきたことだった。こうした学徒は、探究の中でアリストテレスを助けていた可能性を期待させる。例えば、クリュトスはミレトスの歴史や文化について叙述し (FgrHist #490;

Athenaios 12.540, 14.655)、アリストテレスの体制に関する作品に包含されているクリュトス自身の母市についての情報、つまり 158 に及ぶギリシアの都市国家に関する政治体制の収集の一部を準備していたのであらうと考えられる。

アリストテレスが接触を必要としていたもう一つの場所はマッシリアだった。彼がマッシリアの体制について書いた<sup>(30)</sup>だけではなく、彼の作品に現われるギリシア世界の地方に関する一般的な情報についてだった<sup>(31)</sup>。彼のマッシリアに関する情報提供者が誰であったのかは知られていないが、その可能性のある候補者はピュティアスである。前 4 世紀中頃には、アテネとマッシリアとは密接な関係にあったようだ<sup>(32)</sup>。一例として、次の出来事がある。すなわち、デモステネスの叔父デモンはマッシリア人ゼノテミスによって告訴されていた。それは他のマッシリア人で船舶所有者のヘゲストラトスを巻き込んだ複雑な計画の一部であり、ヘゲストラトスは、デモステネスによれば、デモンから存在しない積荷に対して基金を借り入れ、船を沈め、貸付の見返り担保を支払い拒否していたというものだった (Demosthenes 32)。マッシリアとアテネがピュティアスの時代に恒常的な商業関係を維持していたことをその話は示唆している。そしてピュティアス自身がアテネにやってきていたということは不合理だとは言い切れない部分がある (Pytheas, Roseman, ed., p.148)。それは、多くの箇所でアリストテレスの言葉にピュティアスの言葉が反映されているという理由からでもある<sup>(33)</sup>。しかしながら、アリストテレスは、極北地方の現象を議論する<sup>(34)</sup> さいに、ピュティアスの探究から出た知識を持ち合わせていなかったように思える。そして何らかの関わりはピュティアスの旅以前のものであったことを示している。

#### 4. 現代の研究者たちのピュティアスとその旅に関する見解

確実性をもっていわれることのほとんどは、ピュティアスの旅が、そしてその旅の間の探究が『海洋について』という論考の中で成稿されているのだが、恐らく前 320 年代あるいはその直後に生じており<sup>(35)</sup>、アリストテレスにはまだ知られていなかったからだと考えられる。そしてまずアリストテレスの学生ディカイアルコスに、それが引用されたという理由から年代づけられている。このアレクサンドロスの時代辺りだということは多くの研究者に

よって支持されている<sup>(36)</sup>。それ以外の年代を主張する人々は議論そのものに実質的な不備があるように思われる。ポール・ファールは、その年代として前 380-360 年を提案し<sup>(37)</sup>、セルウィウスの漠然とした文節をもとにしている (Servius, on Georgics 1.30)。それはピュティアスの最も著名な地名トゥールの言及をなしているもので、クテシアスとかディオゲネスといった人物にも用いられている。このクテシアスが誰であったのかは定かではないが、もしその名のうちでよく知られていた人物であるならば、アルタクセルクス 2 世の宮廷の科学者で、前 4 世紀初めくらいにトゥーレを引用していたことになる (FgrHist #688, fr.64)。しかし、その脈絡の可能性はかなり低いと思われる。この不確かなクテシアス像に加えて、クテシアスの関心がある地域に、セルウィウスの解釈の遠隔さや独特さを伴って、かつトゥーレの一般的な見当違いを伴って、対処しなければならなかったようだ。一方、ディオゲネスという人物は恐らくアントニウス・ディオゲネスで、幻想的作品『トゥーレの先の信じがたい物事 Incredible Things Beyond Thoule』の作者で、普通ローマ時代の人物だと見做されているが、ファールは彼の作品を自らの理論的支持を与えるよりも早く年代づけていた<sup>(38)</sup>。これら全て議論が脆弱なもので、ピュティアスに関する他の年代に不満のままで残っている。

また、クリスティーナ・ローズマンは、その旅が公表を伴って 30 年後の前 350 年辺りだと主張している。その理由は漠然としており、旅とアリストテレスの世界との間の直接的結びつきを断絶しようとしている (Pytheas, Roseman, ed., p.155)。また、ピュティアスをアレクサンドロスの時代以降に年代づける学者もいる。例えば、ケアリーとウォーミントンは前 310-306 年を主張していた<sup>(39)</sup>。その理由として、ピュティアスがシラクサに対する防衛という場合に、カルタゴ人が戦略の方向転換をしてきたときに、ヘラクレスの柱の方へ行かざるをえなかったという推測をもとにしていた。かなり貴重な推測だけれども、この年代はピュティアスがヘラクレスの柱の先へ出かけたと信じている人になら妥当だし、その可能性を捨てきれないのも事実である。リュス・カーペンターはもっと遅い時代、前 240-238 年を主張している<sup>(40)</sup>が、これはディカイアルコスやティマイオスによって引用から外されたとして、ピュティアスがいつヘラクレスの柱を通ったのかについて、かなり強調して再置していた。多くの学者はこの係争点を、探検者を年代づける

原初的基準として用いており、それは気をそらすもののように思える<sup>(41)</sup>。また数年の隔たりのあるヘラクレスの柱の先への二度の旅が理論上必要であったという事実には無知である。もしピュティアスが、カルタゴが方向転換したときに、外洋への航海をぶつけようとしていたのなら、彼は航路が最終帰還には自由であるという期待をどのように保持しえたのか、というような疑問が残ってくる。ピュティアスをアリストテレスとアレクサンドロスの時代から動かそうとするあらゆる議論は、その時代に彼をおく議論よりも弱いままであるという事実が残っている<sup>(42)</sup>。ピュティアスの旅は前 330 年代にエフォロスの歴史が刊行されたさいに、促進されていた時代の流れを見出さるかもしれない。そこには、極北に関する広範な材料を伴っている。そのほかに、アレクサンドロスの意図に関する西地中海における認識があっただろうと思われる。ピュティアスがリュケウムにいたのか、あるいはアテネを訪問していたのかは、まだわかっていない。ただ、教養人として彼はアテネ、あるいはマッシリアでの研究を通して、その時代の最新研究にアクセスし、このことは彼が利用していた天文学に最新の発展を含むものだったといわれている。

## 5. 登場する地名の整合性

ピュティアスを引用した初期の現存作家は、前 2 世紀初期のニカイアのヒッパルコスである<sup>(43)</sup>。しかし、現存言及のほとんどはストラボンの『地理書』やプリニウスの『博物誌』からのものである<sup>(44)</sup>。例えば、クレオメデス、ゲミノスやアエティオスのような後 1 世紀の作家たちはピュティアスを簡単にだけれども、引用していた<sup>(45)</sup>。ただ、ストラボンやプリニウスは、ピュティアスについて知っていたヘレニズムの作家たちの幅広い範囲を示していたことも事実である。例えば、ディカイアルコス (Pytheas, Roseman, ed., p.155)、ティマイオス (Plin.NH 37.35-6)、エラトステネス<sup>(46)</sup>、ポリュビオス (Strab.2.4.1-2, 4.2.1)、アルテミドロス (Strab.3.2.11) やラムプサコスのクセノフォン (Plin.NH 4.95) である。アブデラのヘカタイオスがこのリストに付加されていたのかどうかは不確かだが、彼の“On the Hyperboreans”は、たとえば地理的幻想であったとしても、ピュティアスの説明から引き出していたのかもしれないといわれている。ディカイアルコスの同時代人として、彼はそ

のときマッシリアの探検に注意を払った最初の人物の一人だったのだろう<sup>(47)</sup>。

ピュティアスに関する伝承は、そのほとんどがストラボンに収められているように、ほぼ普遍的に適さないものである<sup>(48)</sup>。ストラボンは彼を絶えず嘘つき呼ばわりし、寓話の創造者であるとか、作り話をする人だと呼んでいた<sup>(49)</sup>。ときに、敵意がその人格形成に少なからず影響を与えていた。例えば、ポリュビオスはピュティアスを探検者としての自らの評価に対するライバルとして見做していた<sup>(50)</sup>。ただ、その対立の大部分が宇宙だけでなく、後期ヘレニズム時代における訓練としての地理的進化によっており<sup>(51)</sup>、しばしば地球の遠隔地における奇妙な現象の報告に疑いを抱きがちであったことになっている。さらに、地理的幻想やロマンスの作者たちは、しばしばピュティアスからの情報を取り入れていた。それ自体は彼の判断を助けるものではなかったようである<sup>(52)</sup>。もしピュティアスが北方の温暖な気候について報告していたのなら、古典古代では未知であったメキシコ湾流によるもの<sup>(53)</sup>で、これが彼に信頼を寄せることのできない大きな理由になっていた可能性が強いと思われる。

北極について、より知識をもっている現代的な見解は、もっと寛大なものだった。ピュティアスの旅は、古代の探検のうちでも最も意義深いものの一つとして残っている。ピュティアス自身が叙述しているように、彼は「ガデスからタナイスに至るヨーロッパの全沿岸を航行」<sup>(54)</sup>し、ときには歩いて旅を続けたと言われている。ガデスが効果的な出発地点として表わされているので、彼はマッシリアからガデスまで陸路横断していったのかもしれない。それはヘラクレスの柱近辺でカルタゴ人との遭遇を避けるような努力をしなければならぬ旅だったと考えられる。ただ、「タナイス」が現在のドン川と同名の川、あるいはその河口にある町、すなわち黒海の北端について言及していたのかどうかは議論の余地を残している<sup>(55)</sup>。ヨーロッパ北部から黒海まで移動するのは全く可能であったけれども、これはエウトゥメネスが西アフリカでナイル川に行きついていたように、ガデスに対する東のはるか遠方に与えられた別の地名として「タナイス」という名をのちに表現した<sup>(56)</sup>のか、あるいはバルト海に注いでいた河川の一つが実際にはタナイス川だったという推測だったのか、あるいは二つの旅の合成を示していたのかもしれない。

ピュティアスの旅に関する言及はかなり散逸しているので、その経路の詳

細を調べるのはむずかしいように思われる。それは古典古代以来の問題として残っており、典拠からの直接的利用だと見做されていた<sup>(57)</sup>。さらに、ピュティアスに関する古代の伝承は非常に否定的なもので、探検者が引き合いに出されるときでさえ、普通嘲笑されており、それで彼の言葉の正確な文脈は疑わしいものだったろうと言える（例えば、**Strab.1.4.5**）。恐らく、隠れた断片も存在しており、そこでピュティアスは引き合いに出されていたが、認知されていなかった<sup>(58)</sup>。

ピュティアスは、マッシリア出発以前に、旅を通じて、自由裁量で決定することができた<sup>(59)</sup> ので、信じられているように、ビザンティオンのものと同一航路であるということが理解できた<sup>(60)</sup>。それで、彼は出発した。ストラボンの典拠がこの点でとりわけ混同しており、間違いが多かったけれども、最初の部分が歩行旅であったことを示している (**Strab.3.2.11**)。歩行旅 — ピュティアスはその機会を与えていたと知られているように (**Polyb.34.5.7 = Strab.2.4.2**) — は、ヘラクレスの柱でのカルタゴの封鎖を避けるためだったろう。しかし、ストラボンが単にマッシリアの内陸商業経路を概観していただけだという可能性も残っている<sup>(61)</sup>。これらは少なくとも前5世紀、マッシリアの産物やギリシア本土からの産物がフランスの内陸部を通ったときからのことだった。マッシリアの輸入はフランスで葡萄酒醸造を始めたきっかけになった<sup>(62)</sup>。大西洋横断への初期の方法は、ナルボ（アウリエヌスのいうナール川）<sup>(63)</sup> から内陸に向かうもので、アラックス（現代のオード）の緩やかな溪谷を上がり、上ガルムナ（現代のガロンヌ）の方へ横切り、トゥルーズを過ぎて、ボルドーで大西洋へ下りるというのが、古代から近代によく旅された経路だった<sup>(64)</sup>。これはピュティアスが大洋に達した方法だと思われるが、幾分混同した流れではあるけれども、彼の旅を絶えず支えていた場所であるガデスを過ぎてその先に行くことはなかったであろうというのが一つの見方である。ストラボンはガデスを、より信頼性の高いピュティアスの別のもと思われる旅と結びつけているように思える。エラステネスはピュティアスがガデスからイベリア沿岸に沿って伝承的に記録されていた距離を報告していた (**Strab.3.2.11**)。しかし、これでさえも、ピュティアスが現実にはガデスから旅をしたことを意味しているものではない。ただ、この距離が当分の間は既知のものとして利用されていた。ストラボンの典拠に見える非公

開読物は、エラトステネスがピュティアスに寄せていた関心が距離ではなく、他の重要な文言によっていたこと、そして北イベリア（すなわち南フランス）が古い全大洋航路よりもケルト人の領土にアクセスするのが容易であったことを示している。このように、ピュティアスのガデスへの経路 — 彼が確かに叙述していた場所<sup>(65)</sup> — の組み合わせは、彼が別のときにそこにいた理由であったのか、あるいは大洋への旅がガデスで始まったという推測によっているのか、そのいずれかであろう。ティマイオスは、ピュティアスの旅に、アルゴ探検隊のものを重ねることで、神話的な結びつきを与えていた。アルゴ探検隊はタナイス川を航行し、アルゴの土地を手繰り寄せ、そして大洋へと下っていき、海岸沿いにガデスへと航行していた。それはピュティアス自身の旅に対応するものだった<sup>(66)</sup>。ピュティアスは恐らく、一生の間、幾度かガデスに行ったはずだろうが、その旅は彼の北方旅の一部ではなかっただろう。簡単な商業経路の存在は、カルタゴ人による海路使用への妨害の可能性、そしてピュティアスが歩いて旅をしたという叙述、彼の旅の第一段階への全ての点は、北西フランスへの陸路だった<sup>(67)</sup>。

フランスの北西端に到達したのち、ピュティアスは多数の島々を記録していた。その地名は現存史料のストラボンに引用されていなかった (Strab.1.4.5、エラトステネスを引用)。付け加えて、オスティミオイと呼ばれた部族があり、さまざまな形で、そしてピュティアスの他の引用の中に叙述されていた (Strab.1.4.3, 5; 4.4.1; Stephanos of Byzantion, “Ostiones”)。ストラボンはその部族をオウエクシサメと呼ばれる場所の近くに置いていた。そして彼らが大洋に長く突き出した半島に居住しており、イベリアのかなり北方で民族的にはケルト人がいた地域であった。それで、オウエクシサメは一貫してウシャントだと見做されている (Pytheas, ed. Roseman, p.38)。それはプルターニユ北西岸沖の島で、近代にはイギリス海峡を南に航行する船舶の航行指標になっていた。ピュティアスがオウエクシサメ — 明らかに彼の時代では半島端 — に達したときに、彼はまだ、マッシリア人には全く親近感のある領域にいた。オスティミオイ人はアウィエヌスのオストゥリュムニデスと恐らく結びつく地名だろう<sup>(68)</sup>。

この地点まで、ピュティアスは既存の商業航路に従っていた<sup>(69)</sup>。しかし、ここから彼は本質的に未知の世界へと入ったと思われる。ヨーロッパの北西

端の先にある土地に関する情報が長らく役立っていたけれども、それは恐らくフォーカイア人の時代のものだった<sup>(70)</sup>。

オウエクシサメの地域から、彼はカンティオンへ行ったと思われる。距離にして数日のところにあり、レノス川河口の対岸にあった。この二つの地域は互いに眺望可能だといわれていた。仮にカンティオンがブリテンの南岸（ケント）だと考えれば、ピュティアスではなく、河川についてよりよい情報を与えていたストラボンがそれとライン川河口を関連づけていたのかもしれない<sup>(71)</sup>。カンティオンは40000スタディオンの周囲をもつプレッタニケと呼ばれる大きな島の一部で<sup>(72)</sup>、ピュティアスが歩いて旅をしていたところでもある<sup>(73)</sup>。これは彼の経歴に関する顕著な陳述の一つであり、広範な私的探検のさらなる証拠であると言える<sup>(74)</sup>。ピュティアスのプレッタニケの大きさに関する若干の文字が残存しているようで、その中でもっとも著名なのがディオドロスのものだ<sup>(75)</sup>が、三角形のブリテンを表わし、そのヨーロッパ側はカンティオン — ここで、ヨーロッパ最接近点と定めており、ケントの南フォアランド、つまりドーヴァーの北東 — からベレリオン（恐らく土地の終焉）<sup>(76)</sup>まで7500スタディオンの距離がある<sup>(77)</sup>。カンティオンからオルカの北端までの東側 — スコットランドの北端の一つ、すなわちダンネット・ヘッドかダンカンズビー・ヘッド — は、15000スタディオンである。オルカの名はオルクニーズ近辺だと考えられる。西側はベレリオンに戻り、20000スタディオンで、総距離42500スタディオンになり、ポリュビオスが与えた40000スタディオンの周囲にまさに近いものだった<sup>(78)</sup>。

ディオドロスの測定は、トロイア戦争時代のギリシア人にかなり類似して、土着民のかなり単純な生活様式の中での叙述に従っている。これはディオドロスの時代の時代錯誤的なもののようで、彼がカエサルの遠征 — 約束が満たされず、ディオドロスの作品の既知の限界を越えていたらしい — がその時代とは別に、この初期の簡単な民族学を設定していたことを検証していたときに、ブリテンの民族学を詳細に論じされるものだった<sup>(79)</sup>。残念ながら、ピュティアスのブリテン全域の親近性のある陳述にもかかわらず、さらなる詳細な解釈は、もしそれが残存しているならば、それらが見做されるはずのない後世の史料の中に深く埋没してしまっている。ポリュビオスは、カルタゴ陥落後、リゲル（ロワール）以遠に出かけ、プレッタニケもピュティアス

もいずれも何も学ぶことができなかった<sup>(80)</sup>。恐らく、マッシリア人の旅の私的な性質のさらなる指摘すらできなかっただろうし、何も彼の情報の残存に伝えることはなかったはずである。

若干の事実は、ブリテンの島々との親密さを述べていたピュティアスから収集されていたはずである。彼はマッシリアで行なっていたように何度か緯度の計算をしていたようで、真冬の太陽の最大高度を6ないし4ペクスー肘から指先までの長さ — に決定していた<sup>(81)</sup>。この緯度は54°17′ — ヨークの真北 — と58°17′ — スコットランド北端に近い場所 — だと計算されており、恐らくその地点を見ていた。ストラボンがまた、マッシリアからの距離を与え、それが恐らくはもともと緯度から転じたものだった。これらは6300 スタディオンと9100 スタディオンで、52°12′と56°12′の位置 — ケンブリッジとダンディーの緯度であったろう。このような計算が天文学的、地理学的、史料学的な、かなり大きなばらつきと困難さを積み込んでいることを言う必要はない<sup>(82)</sup>。それにもかかわらず、それらはケンブリッジの緯度からスコットランドの北端までのイギリスを広く横切っていたと思われる。広く離れた場所での真冬の光景もまた、ピュティアスが数年間その場にいたことを示唆しており、ブリテン中を旅したとの彼の主張にさらなる信頼性を与えている<sup>(83)</sup>。彼は地中海から高緯度の夏の夜を見た最初の人物だったようだ。そこで、太陽の光が夜の間に輝いており、西から東へ反対廻りに動いていた (Hipparchos, Geography, fr.58 = Strab.2.1.18; また, fr.57 = 2.5.42)。この珍しい現象はかなりの注意と貴重な言葉で説明されている。例えば、まれに使用される言葉 παραυγάζομαι (「輝きの様子を与える」)、それは恐らくこの目的のためにピュティアスによって生み出されたのだろうが、それが使用されている (130)。事実、革新的な語彙は彼の論考の一部である。また、προάρκτιον (「くま座の方へ」、あるいは「北の方へ」) は、彼の旅を叙述しており (Polyb.34.5.9 = Strab.2.4.2)、それは παρ'οκεανίτις (「海岸」に沿って) だった (Polyb.34.5.6 = Strab.2.4.1)。衝撃的な文言はプリニウスのラテン語 “angusto lucis ambitu” (「光の狭隘な路」) にのみ残っていた<sup>(85)</sup>。そしてまた、普通ではない言葉づかいを示唆している。このようなめったにない、恐らく新しくさえる言葉は、ピュティアスが宇宙 — κόσμος、ストラボンがピュティアスによる誇張だとして、旅の神ヘルメスの卑しむべき同等性として片

づけてしまった叙事詩的な寓意のある言葉 — の限界を通ったとしても言語的境界の先にまで行ったことを示している (Strab.2.4.2)。

ピュティアスはコーンウォールの錫鉱山を訪れていたはずだ。ディオドロスはカエサルの遠征に関連してブリテンを詳細に論じる約束をした直後に、コーンウォールで錫産業の検証に乗り出した<sup>(86)</sup>。外国人や外国商人に対する地方の歓待に喚起を促したのち、彼は採掘の過程と錫鉱石のイクティス島への輸出を叙述していた<sup>(87)</sup>。その島は6日ほど離れており、干潮時に本土と繋がっていた。その干満の話にそれたのちに、ディオドロスは錫が海峡を横切って、フランスを通過し、いかに輸出されていたのかをさらに記していた。ついには、ローヌ川河口まで達していた。彼の史料は、ブリテンの民族誌や琥珀に続くものに関する直接的な前節の中で、ピュティアスの固有の特徴がはっきりし、マッシリア人の錫航路の方向づけ、干満への関心そして外国人受け入れへの所見を含んで叙述されていた。ディオドロスの直接史料はティマイオスのものだったはずだ (Timaïos, fr.164)。ティマイオスはピュティアスの作品を知っており、彼によって引用され、補強された見解を示しており、イクティス (ミクティムとして)、そしてプリニウスによる錫 (Plin.NH 4.104 [=Timaïos, fr.74])、その部分で「ミクティム」はピュティアス以外の言及であるトゥーレの文脈と結びつけられている<sup>(88)</sup>。

それ以外のことは、ピュティアスのブリテンに関する情報を越えるものではなかった<sup>(89)</sup>。彼はプリニウスの『博物誌』に見られるさまざまな島のリストに関する史料になっていたと思われる。すなわち、40からなるオルカデス、7つからなるアクモダエ (あるいはハクモダエ)、30からなるヘブデス、そして8つの島々はブリテンとアイルランドの間に位置していたと言われている (Plin.NH 4.103)。こうした範疇がピュティアスと関連づけられるのは、琥珀、トゥーレそしてスカンディアエに続く出来事だけでなく、文言の初めに出てくる探検者の叙述によって明らかであり、その全てはマッシリア人の旅と結びついていたからに他ならない。その説明は、ローマの時代にまで遡及され、またマルクス・アグリッパの地図に利用されていた。それ自体はピュティアスから転用された情報を維持していた。それでも、ピュティアスの正確な貢献は、一般的に不確かなままだった。事実、島々の集約的な数値の利用は地図からであったらしいと考えられる。オークニー諸島やヘブライド

諸島は明らかなようである。だが、アクモダエ諸島については、ポンポニウス・メラはドイツ海岸の対岸に位置づけていた (Pomponius Mela 3.54; また、Silberman 版、p.286) が、シェトランド諸島だとも示唆されていた (Pytheas, ed.Roseman, p.90) けれども、スカンディナヴィアの島々のどれかだとされている。その他の8つの個々に名づけられた島々は、その同一視という観点において見る限り、モナ島とモナピア島 (マン島とアングレシー島) を含んだアイルランド海にあったとされる。また、ウェクティス (ウァイト島) やアクサントスのずっと南にオウエクシサメやオストゥリュムニデスと同様の地名があった。ただ、これらの名はプリニウスの典拠の中に挿入されていたピュティアスよりものちの情報を示しているようである。

ピュティアスの旅の本質的な部分は彼の科学的探究であり、アリストレレスの世界やアテネと結びついている。規則的な緯度計算や干満理論に付加して、ピュティアスに見える星の動きに関心を寄せている (Kleomedes, *Meteora* 1.4; また、Strab.2.5.8; 4.5.5)。ことに、天極に星がないことなく、空の四辺形によって示されていたことだった<sup>(90)</sup>。これは恐らく、彼の最も重要な天文学的発見だったろう。この中で、ヒッパルコス、クニドスのエウドコスの間違った結論で、ピュティアスと対照的だった。つまり、エウドコスは極星の存在に信を置いていた (Eudoxos, fr.11 (Lasserre); Eudoxos, ed.Lasserre, p.187)。事実、エウドコスの天文学的探究は、恐らくピュティアスが設定する以前の世代であり、旅における他の鼓舞であったはずだ<sup>(91)</sup>。ピュティアスと同時代人だった、ピタネのアウトリュコスはまだ、彼の球面天文学の理論を発展させた<sup>(92)</sup>。すなわち、ピュティアスとその材料に近づけたかどうかは知られていないが、少なくとも同じ出来事の様相で、ピュティアスの関心は、同時代の天文学的思想の指導的な優勢にあったことを示している<sup>(93)</sup>。

一年余りのち、恐らく、プレッタニケ周辺を彷徨し、原住民の田舎風単一さをほめたたえ、たくさんの天文学的な計算をし、そして恐らくアイルランドに喚起を促し、ピュティアスは北方に向かっていた。ただ、ブリテンから、彼のあとを辿るのはもっとむずかしくなっていた<sup>(94)</sup>。たくさんの地名があり、そのうちのいくつかは親近感があるように思われたが、そのほとんどがそうではなかった。たとえこれらが正確に位置づけられるとしても、それら

が訪れられた正確な順序は闇のままだった。緯度と太陽の計測は、必ずしもその場所として正確な情報を与えていたとはいえない。そして間違いの可能性すらある。伝えられるところでは、ピュティアスによるマツシリアの緯度はビザンティオンのそれと同じで、北へ  $200^{\circ}$  ばかりである。ピュティアスは、真冬の太陽が4ペクスにまでしか昇らないと記憶されていることでプレッタニケの北限を合わせていた。彼の次の真冬の観察は、数日後あるいは一年後だったのかどうか、3ペクス、あるいは少なくとも  $61^{\circ}17'$  だったとしていた。この緯度が陸地にかかっているのは大西洋の3ヶ所のみである。すなわち、グリーンランド南部、フェロー諸島<sup>(95)</sup>、あるいはノルウェー沿岸のベルゲンの北である。この全ては、グリーンランドがかなり受け入れがたいけれども、可能であることは間違いない。ノルウェー沿岸やフェロー諸島は恐らく、同じような理由によっている。ただ、ピュティアスが真冬の太陽高度をフェロー諸島の緯度で計算したという結びつきは誇張のようにも思える。北大西洋の若干の地点の一つであり、彼がその地にいたとは限らず、恐らくスコットランドの  $450^{\circ}$  ほど北の地点を旅していたと推測できる。すなわち、オークニー諸島を通して、シェトランド諸島で東に向かったはずだ。旅はその地方の漁船に乗ってのものだったと思われる<sup>(96)</sup>。

ピュティアスが用いていた航路の鍵は、ずっとのちの年代からのものだけけれども、アイスランドの Landnamabok、すなわち『居住の書』の第2章からきており、それは12世紀に書かれ、870年から930年の間のアイスランドの人口を叙述していた<sup>(97)</sup>。

ノルウェー沖のヘルン島からフェアウェル岬〔グリーンランド南端〕を西に航行し、視界良好ではっきりと見るのに十分近くシェトランドの北を通して、水平線下に半分沈んでフェローの南へやってきて、アイスランドの南へ一日の航行だった。

居住するずっと以前に漁師たちは、この水域と慣れ親しんできて、スカンディナヴィア、北ブリテンの島々、フェロー諸島、アイスランドの間で行き来することができただろう。めったに陸地が視界外になることはなかったはずだ。『居住の書』の中の航路は恐らく、9世紀よりもずっと古いものである。シェトランド諸島からフェロー諸島まで  $350^{\circ}$  ほどで、アイスランドまではそのうえに  $600^{\circ}$  ほどだったと考えられる。それは蟹気楼が手助けだっ

たようだ。

フェロー諸島は11の大きな島と多数の小島と岩礁からなっており、その全ての島々が長く狭いという基本的に同形状で、長い軸で、北西／南東の方向に流れていた。それらの島々はまれに2<sup>キロメートル</sup>以上の広さのある海峡で分けられていた。その最大の島ストレイモイは長さおよそ45<sup>キロメートル</sup>で幅12<sup>キロメートル</sup>以上である。島々の首都トルシャヴンは、その名がその古典性を表わしているが、南の端にある。フェロー諸島の最高点は、近隣のエイストゥロイにあり、海拔882<sup>キロメートル</sup>である。島々は大洋上5<sup>キロメートル</sup>余りのいかなる地点でもかなり切り立った崖である。海岸の湾入、ことにフィヨルドの先端に多数の港がある。ピティアスはフェロー諸島、ことにスデロイの南の島に上陸していただろうが、何かが彼を引き留めることを想像するのはむずかしいと思われる。視界的には印象深いけれども、確かに非居住域であり、アイスランドの独特な現象は何一つなかったはずだ。

この地域のどこかでピュティアスは、80 キュービット [腕尺 (ひじから中指の先端までの長さ; 46-56cm)] の高さにまでなった潮流に遭遇したと申し立てている<sup>(98)</sup>。これは実際、不可能である。事実、北大西洋のこの地域の潮流は全く穏やかだった<sup>(99)</sup> ようだが、ピュティアスは激しい嵐を経験したのか、あるいは地方の伝統から、潮流が極端であったようだというのを聞き及んだのかの二者択一的な考えによるものだろう<sup>(100)</sup>。ピュティアスは事実、潮流に関する初期の理論家である。もっとも意義深いものは、ピュティアスが月の満ち欠けが潮の高低に影響を与えていた<sup>(101)</sup> とするアエティオスの主張を持ち出したことだ。それは幾分問題の多い言質であるが、彼が一般的な方法で、月の満ち欠けに初めて潮を関連づけていたことを意味している。ブリテン北方の例外的な潮が月に結びつけられていたようだ。ピュティアスはまた、潮がガデスから5日間あるいは1700 スタディオンの距離にある聖なる半島でついていたという報告を信用していた<sup>(102)</sup> — それはイベリア半島沿岸にあり、恐らく現代のサン・ヴィンセント岬か —、そしてそれはまた不可能な混乱であり、このよく旅された地域の潮流現象が早くから知られていた結果であり、潮は現実的にガデスから英仏海峡へと北方へ旅するごとに増えていた<sup>(103)</sup>。このように、ピュティアスの解釈は実際、極北の外観上潮流漸減についてのことだった<sup>(104)</sup>。彼が潮流について収集した資料は、エ

ラトステネスまで通用し、さらにローマ期の現存史料にまで、恐らくセレウキアのセレウコス経由で入っていった。セレウコスはとりわけ潮流に関して最初の論考を書いていたはずである<sup>(105)</sup>。ただ、ピュティアスに付随していた史料はとても混同していたので、彼の貢献は単なる孤立的なものではなかったようだ。彼が自らの理論をどの程度までもたらしめていたのかにかかわらず、月と潮流との結びつきは彼の最も重要な科学的業績であったはずだ。彼はまた、大洋への日没に関する観察に関して責務を負っており、その外観上の増加を含むものであった。このような解釈のいくつかは、ピュティアスよりも以前のものであったけれども、ポセイドニオスやアルテミドロスに至る現存文献に帰されている<sup>(106)</sup>。

## 註

- (1) Cary, M. & Warmington, E. H., *The Ancient Explorers*, rev.ed., Baltimore, 1963, pp.47-8, 62; Carpenter, R., *Beyond the Pillars of Heracles*, n.p., 1966, p.146; Carpenter, R., *The Greeks in Spain*, NY, 1925, pp.33-6. 真偽の疑わしいカルタゴの干渉は、Hodge, A. T., *Ancient Greek France*, Philadelphia, 1999, pp.28-30 で議論されている。また、Fabre, P., "Les grecs à la découverte de l' Atlantique", *RÉA* 94, 1992, 12-13 を見よ。
- (2) カルタゴ人はヘラクレスの柱を発見しようとした人を溺死させたと言われていた (Strab.17.1.19、エラトステネスから)。また、Pindar, *Olympian* 3.44-5; *Nemean* 3.20-1; 4.69; Euripides, *Hippolytos* 743-7; [Aristot.], *On Marvellous Things Heard* 84 を見よ。Avienus, *Ora maritime* (380-9, 406-13) に見られる航海の危険に関する強調のいくつかはカルタゴ人の史料 (ヒミルコ) からであり、自らの宣伝を反映しているのかもしれない。Cassidy, V. H., *The Sea Around Them*, Baton Rouge, 1968, p.5 を見よ。
- (3) Polyb.3.22. 年代に関しては、Walbank, F. W., *A Historical Commentary on Polybius*, 3vols., Oxford, 1959-79, vol.1, pp.339-340 を見よ。また、その意義に関しては、Beaumont, R. L., "The Date of the First Treaty between Rome and Carthage", *JRS* 29, 1939, 74-86 を見よ。
- (4) Strab.4.1.5; Pausan.10.8.6, 10.18.7 (デルフォイでの奉納); Thoukyd.1.13 —現実的にマッシリアの建設と結びつけてカルタゴ人に対するフォーカイア人の勝利について言及している。
- (5) Boardman, J., *The Greeks Overseas: Their Colonies and Trade*, 4<sup>th</sup> ed., London, 1999,

pp.214-24.

- (6) 古代の史料は、Arrian, *Anabasis* 2.15.6-24.6; Diodorus 17.40-7; Quintus Curtius 4.2-4; Plut.Alexand.24-5 である。
- (7) Arrian, *Anabasis* 2.24.5; Quintus Curtius 4.4.18; 避難のためにやってきた人と同一人物だったのかどうかははっきりとしない。これらのカルタゴ人に関して、そして彼らのさまざまな説明に関しては、Bosworth, A. B., *A Historical Commentary on Arrian's History of Alexander*, Oxford, 1980-, vol.1, pp.254-5 を見よ。
- (8) アレクサンドロスによるカルタゴへの脅威は、Hawkes, C. F. C., *Pytheas: Europe and the Greek Explorers*, n.p., n.d., pp.42-4 に簡単に概観されている。
- (9) アレクサンドロス歿時 10 年後に、このような遠征の計画はその書簡の中に発見された。そこにはカルタゴ攻撃のために数百隻の戦艦を建造することが含まれていた (Diod.18.4.4; Arrian, *Anabasis* 7.1; Quintus Curtius 10.1.17-8; Plut.Alexand.68.1)。この書簡については、Badian, E., "A King's Notebooks", *HSCP* 76, 1968, pp.183-204 を見よ。
- (10) Hawkes, op.cit., pp.42-4.
- (11) これは地理的知識の中で逆行の稀有な例である。ヘロドトス (1.203) は、カスピ海が陸地に取り囲まれた海であることを知っていたし、その見解はアリストテレス (*Meteorologika* 2.1) に支持されていた。しかしながら、アレクサンドロスは、アレクサンドロス時代の歴史家たちのために史料にかなりの混同があったけれども、カスピ海が海洋と結びついていたと信じていたか、あるいは信じたがっていた。アーリアノスはそのことを二度 (5.26.2, 7.16) にわたって叙述していた。そのいずれの引用もアレクサンドロスの欲望あるいは現実の地理的知識が表現されていたのかどうかについてはいくぶん両面性がある。カスピ海が囲まれていたということは 13 世紀までまだ決定的にはなっていなかった。しかし、それでも多年にわたって受け容れられがたいものであった (Thomson, p.390)。
- (12) アレクサンドロスは大洋に取りつかれていた。アフリカ周航やカスピ海以北へのアクセスに関する彼の考えに付加して、インドに東の大洋が接しており、完全な非居住空間を周航できる (Arrian, *Anabasis* 5.26.1-2; また 7.1 も見よ) と感じていた。彼の妄想は人々の想像にも入っていった。Seneca the Elder, *Suasoria* 1; Quintilian 3.8.16 を見よ。
- (13) Diod.14.93.3-4; Appian, *Italika* 8.1. 前 396 年のウェイイー陥落後にローマのデルフォイ奉納は、マッシリアの宝物の中に置かれていた (アッピアノスはそれを「ローマとマッシリアの宝物」と呼んでいる) し、そのことから密接な関係が存在していたことを推測させる。

- (14) アーリアノス (Anabasis 7.1.4) によれば、アレクサンドロスはブリテンへの遠征を沈黙考していたのであろう。これはピュティアスに関する何かを聞き及んでいたのかどうかという疑問が生じてくる。アーリアノス以外のいかなる史料もこのような計画を叙述していない。ただ彼はブリテンが地球の最遠地点を形成していたことを示すという条件の中でそれを叙述していた。アーリアノスのではなくアレクサンドロスの時代の言い回しとして。
- (15) Diod.16.76.5. エフォロスはまた、5年後 (FGrHist #70, fr.223)、すなわち恐らく刊行年だろうが、エウアイネトスのアルコン職を叙述していた。
- (16) Ephoros, fr.30a = Strab.1.2.28. この文節に関しては、Aujac, G. & Lasserre, F, eds., Strabo, Géographie 1, Paris, 1969, p.196 を見よ。
- (17) Ephoros, fr.42 = Strab.7.3.9. 彼の史料は恐らくヘカタイオス (Barber, G. L., The Historian Ephorus, Cambridge, 1935, pp.118-19) であろう。それは同時代の商業情報で補足されている。エフォロスはまた、ヒミルコの探検に注意を払っている (上述, pp.27-31)。
- (18) Ephoros, fr.129a = Plin.NH 4.120; fr.130 = Strab.3.1.4. エフォロスは、詩の中には叙述していなかったけれども、アウイエヌスの『沿岸風土記 Ora maritima』で終っていた材料の史料になっていたはずである (Hawkes [ 上述, n.14], p.23)。ガタデスに関する彼の議論は、ある程度までケルト人も含んで、恐らく『ニコメデス王に奉献されたペリプロス (150-95)』の作者によっても用いられている。彼は詩のどこかにその名を引用していた (472, 546 = Ephoros, fr.144, 145)。
- (19) ケルト人は最初、もしアウイエヌスの『沿岸風土記 Ora maritima』に埋もれていた史料の一つがもっと早いものではなかったなら、ミレトスのヘカタイオス (FGrHist #1, fr.54-6) によって叙述された。ヘロドトスはケルト人をイステル河口、あるいはヘラクレスの柱の先に位置づけていた (2.33, 4.49)。彼らの領土に至る二つの経路の証拠と同じくらい自家撞着しているのだが、彼らが極西民族の二番目の集団であったと信じていた。彼はまた、一般的には小アジアやスキュティアでの出会いという条件のもとではあったけれども、キンメリア人を何度も叙述していた (1.6 etc.)。
- (20) ピュティアスに関する参考文献は膨大であり、彼は地理学や天文学の学生としてだけではなく、Fridtjof Nansen (In Northern Mists, tr.Chater, G. C., NY, 1911, vol.1, pp.43-73) や Vilhjalmur Stefansson (Ultima Thule, NY, 1940, pp.1-107) のような北極探検としての関心を掻き立てていた。ピュティアスの断片の無数の出版物があり、その中で著名なものが Mette (1952)、Stichtenoth (1959)、Roseman (1994) や Bianchetti (1998、それ以前の完璧な参考文献を含んでいる) がある。以前の

詳細な研究の中には、Cary & Warmington, pp.47-56 を引用している。Broche, G.-E., *Pytheas le Massaliote*, Paris, 1935 があるが、Dicks, D. R., *The Geographical Fragments of Hipparchos*, London, 1960, pp.181-2; Hennig, vol.1, pp.155-82; Thomson, pp.143-51; Aly, W., *Strabon von Amaseia* 4, Bonn, 1957, pp.461-75; Gisinger, F., “Pytheas” (#1), RE 24, 1963, 314-66; Carpenter, *Beyond*, pp.143-98; Cordano, F., *La geografia degli antichi*, Roma, 1992, pp.104-9; Hawkes, op.cit. によって示されているこの作品の解釈と多数の想像的示唆と航路図がそこに含まれている。Cunliffe, B., *The Extraordinary Voyage of Pytheas the Greek*, London, 2001; Bianchetti, S., “Eutimene e Pitea di Massalia: geografia e storiografia”, Vattuone, R., ed., *Storici greci d' Occidente*, Bologna, 2002, pp.447-85; Magnani, S., *Il viaggio di Pitea sull' Oceano*, Bologna, 2003; Nesselrath, H.-G., “Pytheas”, RGA 23, 2003, 617-20 による最近の半専門的研究がある。彼の科学的評価に関しては、Mohr, W., “Des Pytheas von Massalia Schrift ‘Über den Ozean’”, *Hermes* 77, 1942, 28-45; Abel, K., “Zone” (#1), RE Supp.14, 1974, 1028-33; Diller, A., “Pytheas of Massalia”, DSB 11, 1975, 225-6 を見よ。ストラボンがピュティアスの史料を利用したことに関して、Aujac, G., *Strabo et la science de son temps*, Paris, 1966, pp.40-8 を見よ。無数の項目が特殊な出来事に関する次の頁に引用されている。ピュティアスの最遠地名に関して、しばしば異なった国民的な偏見がある。

- (21) Polyb.34.5.7 = Starb.2.4.2: ἰδιωτῇ ἀνθρώπων καὶ πνευτῇ. これについては、Broche (上述、n.37)20-2 を見よ。
- (22) Polyb.4.39.11( 商人情報の蔑視 ); 34.10.6 = Strab.4.2.1; また船乗りの話を嫌っていた Polyb.4.42.7 を見よ。
- (23) Walbank, F. W., “The Geography of Polybius”, *ClMed* 9, 1947, 161 を見よ。
- (24) Dio, R., “La renommee de Pytheas dans l' Antiquite”, *REL* 43, 1965, 456-9 を見よ。
- (25) これはまれなタイトルである。知られている限りでは、Poseidonios (FgrHist #87, fr.28 = Strab.2.2.1) によってもう一度用いられていたが。恐らく直接的な模倣 (Zimmermann, K., “Review of Bianchetti: Pitea”, *CR n.s.*50, 2000, p.30; Tierney, J. J., “The Celtic Ethnography of Poseidonios”, *ProcRIA* 60c, 1960, 196) の中でのことだった。そして恐らくタルソスのアテノドロス (これに関する根本的な理由については、Aujac, G., “Les traits ‘Sur l' Ocean’ et les zones terrestres”, *REA* 74, 1972, 74-5) だった。もっと一般的なテーマ、『地球一周旅行 (Περιοδος γης)』ロードスのアポロニオス (4.761-5a) に至る学者たちによって引用されていた。自立した論考としてこれを見る学者もいる (e.g.Hodge, op.cit., pp.130-1)。
- (26) Kosmas, *Christian Topography* 2.80.6; コスマスの生涯や経歴については、Wolska-

- Conus, W., "Cosmas Indikopleustes", TTEMA 129-31.
- (27) Martianus Capella 6.609. マルティアヌスに関しては、Cassidy (上述、n.2), pp.54-5 を見よ。
- (28) 彼の旅に関する明白あるいは公式の理由（もし必要とされていたのなら）が地図作成— 極北点の範囲にまで達している (Dilke, O.A.W., *Greek and Roman Maps*, Ithaca, 1985, pp.29-30) —、あるいは錫とか琥珀の産地にマッシリアが関心をもっていたことが示唆されている。いかなる単独の理由も彼の関心や旅の範囲の違いをカバーすることはないし、事実上彼の学問的な探究が、政治的商業的関わりが— もし全て残存していたとしても — 忘れられていく一方で、残存していたということである。
- (29) Diogenes Laertius 5.2: その創設は Lynch, J. P., *Aristotle's school: A Study of a Greek Educational Institution*, Berkeley, 1972, pp.68-75 によって論じられている。
- (30) Athenaios 13.576. マッシリアの政治体制も『政治学』(5.5.2, 6.4.5)に見られる。
- (31) 例えば、Strab.4.1.7 を見よ。付言すれば、アリストテレスの "On Marvellous Things Heard" (87, 89) は、マッシリア治世の若干の特質を叙述している。
- (32) Casson, L., "Traders and Trading Classical Athens", *Expedition* 21.4, 1979, 30.
- (33) Pytheas, Roseman, ed., p.127-9. もっと有名な例はピュティアスの「海の肺臓」の叙述 (Polyb.34.5.3-5 [= Strab.2.4.1]), アリストテレスの「動物誌」(5.15) や「動物の部位」(4.5; また Plato, *Philebos* 10; Pytheas, Mette, ed., p.7; 上述、p.85) に見られる用語である。
- (34) Aristot. *Meteorologica* 2.5; また、*On the Heavens* 2.14 も見よ。
- (35) ピュティアスの論考の漠然さが、その出版がまさにアレクサンドロスが亡くなった時だったからと示唆されており、カオスが生じていたことが若干の写本にあるいは厳格な論文のいずれかを意味していた (Hawkes, *op.cit.*, p.45)。
- (36) 前 320 年代後半に年代づけられた旅の正確な年代は、Knapowski, R., *Zagadnienia chronologii i zasięgu podróży odkrywczych Piteasa z Marsylii*, *Prace Komisji Historycznej* 18, 1958 によって計算されている。恐らく正確というよりも想像的なものとして、ヘラクレスの柱の先への旅をもとにして、好奇をそるよう仕上げられ、確かではないにしろ、一年間も継続していた。
- (37) Fabre, P., "Etude sur Pytheas le Massiliote et l'époque de ses travaux", *EtCl* 43, 1975, 25-44 (他の年代示唆の概要とともに)、そして Fabre (上述、n.1), p.16.
- (38) Fabre, P., "Les Massaliotes et l'Atlantique", *Ocean Atlantique et Peninsula Armorica: études archéologiques*, Paris, 1985, p.31.
- (39) Cary & Warmington, *op.cit.*, Baltimore, 1963, pp.47-8.

- (40) Carpenter, *op.cit.*, pp.145-50.
- (41) Magnani, *op.cit.*, pp.78-89.
- (42) 彼の年代についての別の議論に関しては、以前の研究の概要を含んで、Gisinger, *op.cit.*, pp.314-16; Bianchetti, S., “Per la datazione del Περι ωκεανου di Pitea di Massalia”, *Sileno* 23, 1997, 73-84 を見よ。そして直近では、Magnani, *op.cit.*, pp.15-31 による完璧な分析がある。しかし、これら全ては、前 330 年代から前 320 年代がもっとも受け入れやすい年代であると結論づけている。
- (43) Hipparchos, *Commentary on the Phenomena of Aratos and Eudoxos* 1.4.1.
- (44) ピュティアスに関するプリニウスの矛盾する年代に関しては、Roseman, C. H., “Hour Tables and Thule in Pliny’s *Natural History*”, *Centaurus* 30, 1987, pp.93-105 を見よ。
- (45) Kleomedes, *Meteora* 1.4; Geminus, *Introduction to Phenomena* 6.8-9; Aetios 3.17.3.
- (46) Strab.1.4.2-5, 2.4.1-2, 3.2.11; Bianchetti, S., “Pitea di Messalia e l’estremo occidente”, *Hesperia* 10, 2000, 129-37.
- (47) ヘカタイオスの作品 (*FgrHist* #264, fr.7-14) の断片はどこにもピュティアスの名を叙述していない。ただ、例えば巨石のストーン・サークルを思い出させるアポロンの巨大環状神殿 (fr.7 = *Diod.*2.47) のようなかなりの詳細な記述を含んでいる。そしてピュティアスがそのような記念碑を、恐らくは北西フランスであろうが、見たのかどうかについて疑問が生じてくる。奇妙なことに、ヘカタイオスは、ピュティアスよりも古代に関心を寄せていたのだが、現代的な見解は地理的神話の幻想として “On the Hyperboreans” を見がちである (例えば、Hawkes, *op.cit.*, pp.38-9 を見よ) が、ただピュティアスの報告から現実的な情報を含んでいた。ハイパーボリア人はその初期の時代からギリシア文学によって知られている (*Homeric Hymn to Dionysos* 29) し、ヘカタイオスの作品が同時代の地理的材料を含んでいたけれども、その焦点は多少とも神話的なものだった。ハイパーボリア人については、Romm, Edges, pp.60-7 を見よ。
- (48) ディオン (39.50) でさえ、数百年のち、ブリテンについて書いていた人々についてむしろぶっきらぼうであったが、それについては何も知らなかった。ただ学術的当て推量の思いを膨らませるだけのものではあった。つまり、これはピュティアスへの言及のみであった。
- (49) Strab.1.4.3-5. Kidd, I. G. が書いていたように、「ピュティアスは、…彼のペット嫌いの一人だった」 (*Poseidonios, Posidonios 2: The Commentary*, Kidd, I. G., ed., Cambridge, 1988, p.21) とある。また、Aujac, *op.cit.*, pp.45-8 を見よ。そこには、恐らくストラボンがピュティアスを彼の気に入りのホメロスのライバルとして見

ていたことを示唆している。

- (50) Polyb.34.5; また 3.59.7 も見よ。Walbank, F. W., "Polemic in Polybius", JRS 52, 1962, pp.10-11.
- (51) ピュティアスに関する評価が変化したことについては、Dion, op.cit., pp.443-66 を見よ。
- (52) ピュティアスと地理的幻想との結びつきは、プリニウス (NH 4.95) の時代までに明らかである。そこで、ランプサコスのクセノフォンの報告がピュティアスを、それからヒッポデス島 (「馬脚人」) やパノタ島を引用していた。パノタ島では居住民の耳は身体全体を覆っていた。また、Pomponius Mela 3.56 や Stephens, S. A. & Winkler, J. J., eds., *Ancient Greek Novels: The Fragments*, Princeton, 1995, pp.105-7 も見よ。
- (53) Clarke, G. W., "Ancient Knowledge of the Gulf Stream", CP 62, 1967, 25-31.
- (54) Polyb.34.5.6 (=Strab.2.4.1). その史料が読めるように、含蓄は、これがピュティアスをして北方から帰還したのちの二度目の旅であることを示している。この可能性はあるが、混乱を生じており、極北へのピュティアスの現実的な旅に関して地中海沿岸沿いの航海とかなり類似しているもので、ストラボンにもっともらしく叙述されている。それにもかかわらず、ピュティアスの探検が二つの異なった旅になっていったと主張している。その一つは、大西洋や北極へのもので、もう一方はバルト海や黒海航路沿いのものであった。そしてこの現存名はこの旅の名残りである (Dilke, op.cit., pp.136-7 を見よ)。
- (55) ピュティアスやタナイスに関しては、Dion, R., "Ou Pytheas voulait-il aller?", Chevallier, R., ed., *Melanges d'archeologie et d'histoire offerts a Andre Piganiol*, Paris, 1966, pp.1315-36 を見よ。
- (56) 「ガデスからタナイスへ」という陳述は、タナイス川がヨーロッパとアジアとの境界に位置していた (Strab.11.1.5, 11.7.4) ので、航行可能な全世界 (Cary & Warmington, op.cit., p.53) や全ヨーロッパを示すための純然とした形式的なものであった。これについては、Dion, R., "Pytheas explorateur", Rphil 3, ser.40, 1966, 201 を見よ。タナイスがブリテンの二つの地名、すなわちタナティス (現在のタネット・イン・ケント) かタメサ/タメシスのうちの一つの代わりであったと主張されてもいる (Carpenter, op.cit., p.189)。これらに関しては、Rivit, A. L. F. & Smith, C., *The Place-Names of Roman Britain*, Princeton, 1979, pp.466, 468-9 を見よ。
- (57) ローゼマンは 9 行を発見したのみ (Pytheas [ed.Roseman], pp.117-47) で、そのうちの幾行かはピュティアスの現実の言葉を示しているものとしては全く疑わしい。
- (58) Polyb.3.57.3 (Walbank, op.cit., vol.3, p.394) と Diod.5.22 がその例として含まれ

ている。隠されたり、あるいは喪失された断片の問題に関しては、Pytheas, ed. Stichtenoth, pp.20-7 を見よ。そこにはアウイエヌスの『沿岸風土記 Ora maritima』の長い文節（ことに、80-145、オストゥムニデスについて）そしてロードスのアポロニオスのいくつかの文節（特に、4.507-684、アルゴ探検隊の帰還について）を含んでいる。アウイエヌスは、晩年が史料を不確かにさせているけれども、“*Descriptio orbis terrae*” (760) にトゥーレを叙述していた。

- (59) 彼の測量方法（*暑針*を使用）に関しては、Thomson, p.153 を見よ。また、Aujac, op.cit., pp.165-8 も見よ。そこには、彼の計算の概観表がある。ピュティアスは、地球の大きさを決定づけたエラトステネス、ヒッパルコスやポセイドニオスの後の努力に関しての重要な年代史料だった。Diller, A., “Geographical Latitudes in Eratosthenes, Hipparchus, and Poseidonios”, *Klio* 27, 1934, pp.258-69 を見よ。
- (60) Hipparchos, *Geography*, fr.53-5 = Strab.1.4.4, 2.1.12, 2.5.8; Dicks (上述、n.37), pp.187-83; Árpád Szabó, “Strabon und Pytheas – die geographische Breite von Marseille”, *Historia scientiarum* 29, 1985, pp.3-15. 事実、マッサリアはピュザンティオンから 2° ほど北にあり、その誤解はピュティアスによるものではなく、史料の問題である。マッサリアに関する他の解釈は、ティマイオス (FrGrHist #566, fr.70=Strab.4.1.8) に知覚され、ピュティアスから転用されたもののようである (Brown, T. S., *Timaeus of Tauromenium*, Univ. of California Publications in History 55, 1958, p.28-9)。
- (61) ただ、この既知の経路による旅は行程上のもっとも困難な海路の一つを避けるものだったろう。その係争点はほとんどの解釈者たちの無知によっていた (McGrail, S., “Celtic Seafaring and Transport”, Green, M. J., ed., *The Celtic World*, London, 1995, pp.275-6 を見よ)。
- (62) Boardman, op.cit., pp.219-23.
- (63) Avienus, *Ora maritima* 587. ポリュビオスの特殊な言及 (3.38.1-2) は、ナルボとタナイス間の北側については何も知られておらず、ナルボ経路の使用を反映していたピュティアスによっても隠されていた。この文言については、Dion, R., “Geographie historique de la France”, *ACF* 65, 1965, pp.463-4 を見よ。
- (64) その経路は Cunliffe, op.cit., pp.56-62 によって概観されている。また、彼の *Facing the Ocean*, Oxford, 2001, p.332 も見よ。二者択一性はローヌ川からロワール川あるいはセヌ川まで横断するものだったはずである。その経路は錫取引によって（帰路）用いられていた (Diod.5.23; また、Hennig, vol.1, pp.162-5 も見よ)。
- (65) Strab.3.2.11、エラトステネスを引用している。ティマイオスはピュティアスが船でガデスに戻ってきたというヒントを与えていた (fr. 75a = Plin.NH 4.94)。

- (66) Timaios, fr.85 = Diod.4.56.3-6. また、Brown, op.cit., p.32 も見よ。
- (67) ピュティアスの経路の中でのこの割合に関して、Magnani, S., “Le isole occidentali e l’itinerario piteano”, *Sileno* 21, 1995, pp.83-102. を見よ。しかし、Zimmermann (上述、n.45), pp.29-30 も見よ。
- (68) Avienus, *Ora maritime* 90-102. これらの地名に関しては、Lasserre, F., “Ostiens et Ostimniens chez Pythéas”, *MusHelv* 20, 1963, pp.107-113 を見よ。恐らく、利潤に関しては、キュレネの金のスタテル [古代ギリシア都市国家の各種の金貨 (銀貨、金銀合金貨)] で、前 322 年から前 315 年に年代づけられ、財務省の Lampaul-Ploudamézeus 近くで発見され (Giot, P.-R., et al., *Protohistoire de la Bretagne*, Rennes, 1995, pp.215-7)、推論的にピュティアスの旅からの人工産物だった。
- (69) Cunliffe, B., *The Ancient Celts*, Oxford, 1997, p.150. 商業航路は、Cary, M., “The Greeks and Ancient Trade With the Atlantic”, *JHS* 44, 1924, pp.172-7 に議論されている。Léguer 川河口で、ピュティアスの緯度計算の一つの線に近いル・ヤンデの鉄器時代の遺跡は、Cunliffe, op.cit., pp.64-9 によって、ピュティアスが訪問していた場所の様相をもっているものとして示唆されていた。
- (70) Cunliffe, op.cit., pp.91-4.
- (71) Strab.1.4.3. ライン川の河口はずっと東にあり、今日知られているように、ケント沿岸から見ることにはできないが、これはさほど貴重なことではないだろう。しかし、Herrmann, J., ed., *Griechische und lateinische Quellen zur Frühgeschichte Mitteleuropas*, Berlin, 1988-92, vol.1, p.503 を見よ。
- (72) これが本来の形式であるように思える。ストラボンが 2.5 (また 4.2.1) で数か所にわたって用いていた。この部分 (とりわけ 2.5.8) はかなりピュティアスに頼っているように思われるので、恐らくピュティアスの元来の綴りを示している。もっと一般的な形としては、Brittanike であり、ローマ時代のブリテンとの混同であろう (Pytheas, ed. Roseman, p.45)。ディオドロスの若干の写本 (5.32.3) にも “Prettanoi” とある。編者や訳者は、解釈に応じて典拠を変える場合にも、しばしば “P” の文字に不注意である。
- (73) Polyb.34.5.2 = Strab.2.4.1. これがどのような方法でなされたのかに関しては、Pytheas, ed. Roseman, 126 を見よ。ピュティアスがブリテンの西側を北上し、トウーレやバルト海を訪問したのちに東側を南下した (例えば、Dion [上述、n.94], p.207) という示唆は、彼がどのように日程を調整していたのかに関して、答えることのできない疑問を呈している。
- (74) 別の貨幣に特殊な関心があるように思える。それは、前 326 年以降に年代づけられ、デーヴォンのホルネ・チェイスから出土したアレクサンドロスの銀貨である

- (Fox, A., South West England, New York, 1964, p.116).
- (75) Diodor.5.21-2. 他のものに関しては、Walbank, op.cit., vol.3, p.589 を見よ。
- (76) 地名やその場所に関しては、Rivit & Smith, op.cit., pp.266-7 を見よ。
- (77) Nansen, op.cit., vol.1, p.51 は、実体の周辺部が一日の航程まで 1000 スタディオンとして訳出されていたことを指摘していた。
- (78) この測定法が現代の距離にどのような確認を与えているのかは、スタディオンの長さが正確に知られていないので、ほとんど指摘がない。そしてピュティアスが乱雑で、ひどく接合された沿岸に沿って企てられた計算方式—古代以来変化してきた—は、多様すぎるくらいで、かなり困難であろう。プリニウス (NH 4.102) は、ピュティアスを引用して、4875 マイル、およそ 7200 <sup>キロメートル</sup> を与えている。
- (79) カエサル自身はプリテンに関するピュティアスの情報に関心を寄せていたようである。それは恐らくヘレニズム時代の地理的材料を通してのものだった (BG 5.13)。さらに、Roller, D. W., *Through the Pillars of Herakles: Greco-Roman Exploration of the Atlantic*, NY & London, 2006, pp.116-17 を見よ。
- (80) Polyb.34.10.6 = Strab.4.2.1; Roller, op.cit., p.100.
- (81) Strab.2.5.8, 恐らく伝達が明白でないけれども、ヒッパルコスから。また、Hipparchos, *Geography*, fr.61 = Strab.2.1.18 を見よ。ピュティアスの緯度はプリニウス (NH 6.219) によって引用されていたが、トゥーレの叙述だけではなく情報は史料を明白にしているけれども、どんな特定もない。
- (82) 計算に関しては、Dicks, op.cit., pp.185-90.
- (83) 旅の長さに関しては、Dicks, op.cit., pp.186-7 を見よ。Broche, op.cit., pp.239-41 は、短期滞在とか季節的な必需品なしに、187 $\frac{1}{2}$  日という最小限の旅程を計上していた。Magnani, op.cit., pp.162-70. も見よ。
- (84) この文言については、Dicks, op.cit., pp.184-5 を見よ。
- (85) Plin.NH 2.186. これは、夏には北で、冬には南で *aurora borealis* (すでにギリシア人に知られていた。Aristot.Meteorologia, 1.5) というものか、あるいは高緯度で見られる限定的な陽光か。狭隘な光線群は北極の描写に普通のものだった。例えば、Rockwell Kent, の “Resurrection Bay, Alaska (Blue and Gold)” (Bowdoin College, Maine), #80 in Martin, C., *Distant Shores: the Odyssey of Rockwell Kent*, Berkeley, 2000, あるいは Sydney Laurence の “Streak of Sky” (Betty Balderston de Lancey のシリーズで), #37 in Woodward, K. E., *Sydney Laurence: Painter of the North*, Seattle, 1990 を見よ。
- (86) Diod.5.22. この錫取引に関して、Penhallurick, R. P., *Tin in Antiquity*, London, 1986, pp.139-47 を注意深く見よ。その古代史料の使用は求められるものを残している。

また、Cunliffe (上述、n.37), pp.73-92 を見よ。

- (87) この地名の現在の形は不確かである。ディオドロスには、目的格 *Iktuv* がある。プリニウス (NH 4.104) には、“*insulam Mictim*”とある。それは恐らく重複誤写の過ちである。また、若干議論を呼ぶ後世の証拠がある（それについては、de Beer, G., “Iktin”, GJ 126, 1960, 162 を見よ）。仮想主格、*Iktis* は、多数の研究者によって使用されているが、古代の史料には存在していない。また、Rivit & Smith (上述、n.94), p.488 を見よ。
- (88) 6 日間はトゥーレとの混同を示している。その地はブリテンから等距離にあった (Strab.1.4.2)。さもないと、ワイト島 (古代のウェクティス) を示唆しているが、ベンザンス付近の聖ミカエル山 (モン・サン・ミッシェル) が叙述によく適合している (写真 12)。それ以外の示唆はブリマスの対岸にあるパターン山であり、現代の考古学的発掘によって支持されている。そこには、モン・サン・ミッシェルで欠落しているものがある (Cunliffe, B., “Ictis: Is It Here?” OJA 2, 1983, 123-36; Hawkes, C. F. C., “Ictis Disentangled, and the British Tin Trade”, OJA 3, 1984, 211-33)。それにもかかわらず、6 日間の繰り返しはピュティアスの錫鉱山の文脈を強調している。イクティスに関するあらゆる可能な場所は、Maxwell, I. S., “The Location of Ictis”, JRIC n.s.6, 1969-72, 293-319 で議論されている。彼はモン・サン・ミッシェルを支持している。
- (89) ブリテン西方への可能な旅程は、Cunliffe, op.cit., pp.99-102 で論じられている。
- (90) Hipparchos, Commentary on the Phenomena of Aratos and Eudoxos 1.4.1. Arcetri の Osservatorio Astrofisico で用意された地図は、前 330 年にマッシリアから見られた極北地方を示している。小熊座と竜座との間に、天極があり、小熊座の  $\beta$  と竜座の  $\kappa$ 、 $\lambda$ 、天極そのもので構成された四面体になっていた (Pytheas, ed.Bianchetti, fig.2; また、女史の pp.109-11 も見よ)。そして二者択一的な矩形には  $\lambda$  よりむしろ竜座の  $a$  がある (Dicks, op.cit., p.170)。星が矩形をなしていたことにかかわらず、現代の観察者は、北ハンプシャーの夏の夜に北を見上げて、現在の北極星 (小熊座の  $\alpha$ ) の左に大きな空間をたやすく見ることができ、極星そのものはピュティアスの時代のものである。
- (91) Diller, op.cit., p.225; Pytheas, ed.Bianchetti, pp.39-45. エウドコス時代 (恐らく前 395 年から前 342 年) に関して、Eudoxos, ed.Lasserre, pp.137-9 を見よ。
- (92) Aujac, G., “L'île de Thulé, mythe ou réalité”, Athenaeum n.s.76, 1988, pp.330-3.
- (93) Gisinger, op.cit., pp.316-20.
- (94) Hyde, W. W., Ancient Greek Mariners, New York, 1947, p.128; Freeman, P., Ireland and the Classical World, Austin, 2001, pp.33-4. Diod.5.32 のアイルランドの住民

に関する論争は、ブリテンの情報提供者によってピュティアスに言われていたことだった (Carpenter, op.cit., pp.171-2)。また、Bianchetti, S., “Cannibali in Irlanda? Lettura straboniana”, *AncS* 32, 2002, 215-34 も見よ。

- (95) その線は、現実には、ステロイのアクラベリファエローズの南端の南から短距離のところにある ( $61^{\circ}24'$  に位置している)。 $61^{\circ}20'$  と  $21'$  の間にあるずっと南には、フレスジャルナルとスミアルスステイヌルという二つの小島がある。後者はファエロー領土の南限点である。しかし、これら全ての地点は、ピュティアスの線よりも少なくとも緯度で  $7'$  上に位置している。
- (96) 小舟に関しては、ブリテンからの史料 (ピュティアスから幾分のちのものだったけれども) を含んで、Casson, L., *Ships and Seamanship in the Ancient World*, Princeton, 1971, pp.329-43; Cunliffe (上述, n.37), pp.103-6. を見よ。その特殊な関心については、恐らく、ユトランド南岸沖のアルス島の島でデンマークのヒョルトスプリングで発見された船である (Randsberg, K., *Hjortspring: Warfare and Sacrifice in Early Europe*, Aarhus, 1995, esp.pp.19-37.)。1920年代の発掘は、そこに縫い込まれた断片とタールで汚れた完全な船体をもった 19 呎の長さをもつ二重舳先の船 (現在コペンハーゲンの国立博物館所蔵) を蘇らせた。19 人から 22 人の最小限の船員で運行されていた。カーボン 14 の年代は前 345-325 年を示しており、正確にはピュティアスと同時代のものである。船との関わりの中で、前 4 世紀のギリシア製陶器と類似している多数のコケ類の胞子囊があった。恐らく中央ヨーロッパから輸入されたものであろう。船は商業的な機能よりもむしろ軍事的な色彩が濃いけれども、恐らくピュティアスが北方で使用していたタイプに近いものとして知られているだろう。
- (97) Magnusson, M.& Palsson, H. による訳と解説のある *The Vinland Sagas: The Norse Discovery of America*, London, 1965, p.16 を見よ。
- (98) Plin.NH 2.217. キュービットはベクスのプリニウスによる訳語である。
- (99) オークニー諸島の最大距離は 10.4 フィートで、スコットランド北方の他の島々ではもっと短い (National Oceanic and Atmospheric Administration, *The Tables 1995: Europe and the West Coast of Africa*, Washington, 1994, p.167)。ブリテンの島々の最高到達点はプリストル海峡のニューポートにあり、恐らくピュティアスが眺望したであろうが、38.9 フィートの最大点である (p.165)。
- (100) 強烈な暴風がブリテンの島々の周辺で生じており、陸地の浸食や島々の形成に意義深く寄与していた。Thomas, Ch., *Exploration of a Drowned Landscape*, London, 1985, pp.48-52 を見よ。Pomponius Mela(3.55) は、この地域での潮流がどのようにして一つの島を多数にしていたのかを注目している。ピュティアスがス

コットランドとオークニー諸島との間にあるペントランド・ファースで暴風を目撃したことを示唆している (Cary & Warmington, p.50; この地域の現象に関しては、Carpenter, Beyond, pp.172-3 を見よ)。彼は例外的な潮のときに旅行していたようである、Zubov, N. N., *Arctic Ice and the Warming of the Arctic*, tr.Hope, E., Moscow, 1948, p.71 を見よ。

- (101) Aetios, 3.17.2; Plin.NH 2.217 を見よ。この文節に関しては、Pytheas, Roseman, ed., pp.81-2, 103-4; Pytheas, Bianchetti, ed., pp.111-5 を見よ。月との結びつきは、恐らく間違いであろうが、ガレンの全集に見られる“On the History of Philosophy” (88; cf.Diels, H., *Doxographi graeci*, Berlin, 1879, p.634) の中でエウトュメネスに寄与している。
- (102) Strab.3.2.11; エラトステネスから。ストラボンの潮流理解は最小限だった (1.3.11-12 を見よ) ので、彼は恐らくピュティアスの年代に関して多数の問題の根源になっていただろう。ストラボンは一日につき 350 スタディオンの旅の例外的に低水準のものであることに注目して、何らかの混同をしていることを理解していた。
- (103) National Oceanic and Atmospheric Administration (supra, n.99), pp.161-2.
- (104) ケルトの領土における河川の潮流現象についてティマイオス (fr.73 = Aetios 3.17.6) による解釈—仮にフランス西海岸として—はまた、ピュティアスから引用されたものであろう (Cary & Warmington, op.cit., p.49)。
- (105) Poseidonios, fr.86(-Strab.3.5.8-9). セレウキア (あるいはバビロン) のセレウコス は前 2 世紀の人である。彼の史料はポセイドニオスやストラボンに使用され、彼らのここでの潮流現象の説明はまだ幾分概略的であるけれども、ピュティアスの報告を論じたときよりもむしろずっと率直なものである。セレウコスがピュティアスの説明まで含んでいたのかどうかは知られていないが、セレウコスはピュティアス以後月と潮の結びつきに至り、その進捗について首尾一貫した科学的理論を進化させた最初の人物であったようである。さらに、AncCl に論じられている Roller, D. W., “Seleukos of Seleukeia” を見よ。
- (106) Poseidonios, fr.45(=Strab.3.1.5); Poseidonios (supra, n.49), pp.462-3.